

共同研究

「ニュータウンのある『まち』 —地域における大学の役割に関する実践的研究—」 最終報告

杉本 星子・小林 大祐

本共同研究は、2006年より3年間計画で、横島グリーンタウン・向島ニュータウンを中心とした本学隣接地域の歴史と地域社会の現状について研究をすすめるとともに、当該地域の住民と連携した諸活動の実践をととして地域社会における大学の役割について考えることを目的として進められてきた。

最終年度にあたる2008年度は、5月28日と6月18日に、本共同研究の方向性と年間計画についてのミーティングをおこない、メンバー各人が個人研究を進展させるとともに、とくに向島ニュータウンの住民との連携活動を実施することとした。

住民との連携活動として、7月20日に、向島駅前まちづくり協議会の協力を得て、「京都文教響命プロジェクト～地域だんらん計画」の学生とともに、向島ニュータウン3街区集会所において、「向島ニュータウンの思い出を語る集い」がおこなわれ、集会所にあるニュータウンの歴史についての資料と写真記録をみながら、向島ニュータウンの自治会史と住民の現状について聞き取りとディスカッションを実施した。さらに、10月29日および12月14日には、「京都文教響命プロジェクト」が大学に地域住民を招いて実施した「周辺地域歴史講座シリーズニュータウン住民が語る近代史」に、本共同研究メンバーが参加し、ニュータウン住民と在地の農家の方から、地域の歴史についてお話をうかがった。

また、本共同研究の一環として、向島ニュータウンと横島グリーンタウンにおいて活発におこなわれていた二つの文庫活動に関するイ

ンタビューと記録資料の収集、住民が撮ったニュータウン写真の提供による住民にとっての「ニュータウンの記憶」に関する研究も継続されている。

大学が地域に積極的にコミットすることによって、ニュータウンの住空間を外に開くとともに、大学という空間を外に開き、「ニュータウンのある『まち』」の可能性を模索するという本共同研究の目的は、充分とはいえないまでも少しずつ確実に実を結びつつある。本研究会メンバーが3年間の共同研究や個人研究をととして築いてきた地域住民との結びつきは、これからの大学の地域貢献や今後のニュータウン研究発展の基盤となるものと期待される。